自閉症における自己と他者

川瀬泰治

筆者は従来、関係発達論的視点に立った自閉症に対する精神病理的アプローチを主張してきた(1)。前回の論文(2)は、その具体的実践として自閉症児の常同行動の分析を試みた。そこでは自閉症児の常同行動がそれを「常同」とみる我々の時間意識と深くかかわるものであることが示された。そこから我々自身の時間意識の成り立ちを探求していくと、時間意識の基となる根源的時間に行きつく。木村(3)によれば根源的時間は我々の時間意識を産みだしつつ同時に自己の生成である。自閉症児にとって問題となるのはこの根源的時間の働きであり、従って自閉症児においては我々と同じ時間意識を想定することはできない。そして彼らにとっては、繰りかえし反復される行動が必ずしも「常同」というわけではないといえるのである。

このように、自閉症児の時間は未だ時間といえるものになっていないことがうかがわれ、またそれに付随して、かれらの自己は十分に生成されていないのではないかと思われる。中田(4)によれば、常同行動は「私がなす」という自己感を充足しようとしてなされる、いわば自己生成の活動であるが、常にそれが不全に終わるということである。本稿は、上述の視点によりながら自閉症児の自己の成り立ちをさらに究明しようとするものである。ところで、自己は単独で成り立つものではなく、常に自己ではないものとしての他者の成り立ちと一対である。従って、自閉症児の自己の問題を考える際に、自閉症児にとって他者がどう現れるのかという問題を同時に考えなくてはならない。最近発達心理学の領域で注目されている「心の理論」は、自閉症児にとっての他者という観点からみて興味深いテーマである。ここでは最初に自閉症児における自己と他者の問題を「心の理論」との関連において考えてみたい。

自閉症と「心の理論」

類人猿や幼児を対象として行われていた「心の理論」の実験を自閉症児に応用したのはバロン＝コーエンら(5)である。彼らの実験は「サリーとアンの実験」と呼ばれ、一般的な実験の手続きは以下のようである。サリーとアンと名付けた2体の人形を使って次のストーリーを作る。主人公サリーが自分のビー玉をカゴに入れて外出し、その間に友達のアンがカゴからビー玉を取りだして箱の中に入れた。サリーはそのことを知らない。外出から帰ってきたサリーはビー玉で遊ぼうと思った。そこで、サリーはカゴと箱のどちらを探すだろうか、という質問をするものである。いろいろな年齢の子どもにこの質問をしてみると、4歳以下の子どもは箱と答えるものが多いが、それ以上の年齢ではほとんどの子どもがカゴと答える。この課題は、サリーが途中の変化に気付かずにビー玉の位置について誤った信念を持つようになり、その誤った信念に基づくサリーの行動を被験者が予測できるかどうかを問うので「誤った信念」の課題と呼ばれる。この課題をクリア

するためには、ビー玉の位置についての被験者自身の信念と人形のサリーが持つであろう信念との違いに気付かなければならない。さらに、サリーの信念が自分の信念とは違ったものであることに基づいて、サリーの信念（サリーのビー玉の位置についての表象）を表象すること、つまりメタ表象が必要となる。

ところが自閉症児の場合は、知的な能力が高く、精神年齢で5～6歳を越えていてもこの課題に失敗する。このことから自閉症児にはこのメタ表象の能力が欠けており、それが自閉症の中核的障害ではないかとされたのである。この結果は従来の自閉症研究の中でいくつかの画期的な意味を持っていた。ひとつは、ウイングの三つ組と呼ばれる自閉症児の3症状、つまり対人関係の困難、コミュニケーションの困難、ごっこ遊びの困難は、これまで相互に関連づけることが困難であったが、このメタ表象の欠陥という一つの原因によって統一的に理解されるようになることである。つまり、フリス(6)によれば、たとえば子どもがごっこ遊びでバナナを受話器であるかのように考えるのは、メタ表象の決定的要素であるデカップリング decoupling によるものであり、ものごとの指示性、真実性、実在性などの判断を棚上げにして括弧つきで扱うことによって可能となるのだが、自閉症児ではこのデカップリング機構に欠陥があり、その結果としてごっこ遊びがほとんどみられない。またそこから派生して、人間には心があり、他人と異なる考え、知識、信念、そして感情をもつということの意味が十分に飲み込めない事の結果として、対人関係の問題が生じる。さらに、他の人が何を考え、感じ、望むのかと関連させて理解出来ない事からコミュニケーション障害生じる、というように関連づけることができるのである。

また一方で「心の理論」は従来の言語・認知障害説の行き詰まりを打開するものと思われることである。自閉症研究におけるの言語・認知障害説では言語や認知の障害を自閉症の中核障害と考えて、それらの機能の欠損や歪みを明らかにしようとしてきた。しかし、それらの研究は「自閉性」と直接関連する言語や認知の障害をつきとめることが原理的に困難であり、その結果「自閉性」を単なる二次的症状として研究の中心テーマから外していくという方向をとった。しかしなんといってもやはり自閉症の特徴はカナー以来「自閉性」であり、ウィングの三つ組を顕著に示す一群の子どもたちがいるのは確かなことである。従って、当然ながら「自閉性」を問題にしえない自閉症研究は暗礁にのりあげていった訳である。そのような状況の中で、メタ表象という認知能力が直接「自閉性」に関るものとする点で、「心の理論」は言語・認知障害説の困難を打開するものと思われた。そして、自閉症では「心の理論」という認知的な能力の障害が本態であり、感情的、コミュニケーション的、社会的障害は症状であるとされ、自閉症の「心の理論」の障害の特徴を解明すれば、自閉症の全貌を明らかにし、「心の理論」実験を応用した認知テストを使えば自閉症の診断もできるということで、バロン＝コーエンらの研究以来多くの研究が行われてきたのである。

しかし、自閉症と「心の理論」との関係についていくつかの疑問点が生じてきた。例えば、自閉症児でも誤った信念課題に合格する子どももいること、あるいは聾(7)や先天盲(8)といった自閉症以外の被験者でも誤った信念課題に失敗する被験者がいることが分かった。また当初、精神発達遅滞の子どもは「心の理論」を持っているとされてきたが、よく調べてみると知的レベルの低いダウン症児は失敗することが分かった(9)。これらの事実から、「心の理論」の障害を自閉性の本態とする考えが疑問視されるようになってきたのである。また、自閉症に特徴的な行動である同一性の保持、常同行動や極端な興味のかたよりといった側面が、「心の理論」によっては説明できないという問題もある。これらの行動は自閉症児にかなり広くみられるものであるにもかかわらず、これまでの自閉症研究では軽視される傾向にあったが、そ

れは「心の理論」研究でもいえるようである。自閉症の充全な理解を目指すためには当然これらの特徴を視野にいれた立論をめざすべきであろう。

さらに、「心の理論」研究においては「心の理論」が系統発生と個体発生のいつの時点から可能となるかということが大きな関心事であり、「心の理論」自体はその種類によって出現の時期に多少の差はあっても、ある時点で完全な機能として出現するものと考えられているようである。従ってそこでは「心の理論」があるかないかという単純な二分法が採用されることになり、4歳以前の普通児や自閉症児は「心の理論」の欠如態としてとらえられることになる。そしてこのような考え方によれば、4歳以前の幼児と自閉症児との間に心的構造のうえで基本的な違いはないということになるが、果たしてそうだろうか。浜田(10)もいうように、4歳よりもはるか以前から自閉症児と健常児の間には他者とのやりとりの面で大きな違いがあるのである。この違いの本質はなにか、4歳以前に普通児にはみられるが自閉症児には欠けているものにこそ注目すべきであり、またそれが「心の理論」の発生や子どもの生活のなかでの「心の理論」の意味を明らかにするものではないか。このような視点は、自閉症児にとって他者や世界がどのように現れるのかといった本研究のテーマにとって重要であるが、自閉症の本態は何かという問題に深く関ることでもあるし、常同行動や興味のかたよりといった特徴を含んだ自閉性全体を統一的に理解する糸口にもなると思われる。

以上のべた視点は、「心の理論」の起源を解明しようとする方向といえよう。「心の理論」の起源を問題にした研究はまだ少ないようだが、例えば次の研究がそれに該当するだろう。例えば、Ozonoff(11)は誤った信念の課題に成功する自閉症児でもハノイの塔の課題やウィスコンシン・カード分類テストで失敗するという結果を報告した。これらのテストはもともと大脳前頭葉の損傷患者の心理機能を調べるために使われたものであるが、前頭葉の実行機能 executive function と呼ばれる働きを明らかにするものである。実行機能とは、例えば目的地に到達するためにはそれぞれの角でどちらに曲がればよいかを絶えず自分に尋ねながら行動するといった、いわゆる行動のプログラミングの過程である。そして自閉性の直接の原因となっているのはこの実行機能であり、「心の理論」の欠如はその結果のひとつにすぎないのではないかとする。

しかしミッチェル(12)は、実行機能障害を典型的に示す前頭葉損傷患者は必ずしも自閉的ではないし、また実行機能障害が必ずしも信念の認知や心の存在に対して困難を示すわけではないという問題を指摘し、実行機能と「心の理論」との間の関係に対して否定的な見方をしている。また仮に実行機能が「心の理論」の原因になるとしても、さらに実行機能の起源が問題となるであろう。これに関連するものとして、大脳の前頭前野の機能に「心の理論」の起源を求めようという熊谷(13)の研究もある。彼は、行動の欲求や感情といった機能を司る脳幹、視床下部、大脳辺縁系を含む領域（第一ブロック）と運動の実行や制御と行動のプログラミングを担当している大脳前頭野(第3ブロック)とを結び付ける部分である前頭前野の障害が自閉症の障害の本態ではないかとし、発達の初期に第一ブロックでの障害が現れたために前頭前野に発達の遅れが生じたのではないかという仮説を提唱している。しかし、このような生理なメカニズムに起源を求める前に「心の理論」や実行機能に先だって現れる心的現象の徹底した記述が必要なのではないだろうか。

身体レベルにおける他者理解

以上、近年の「心の理論」研究ブームの発端となったバロン＝コーエンの研究をもとにして「心の理論」と自閉症との関連についてみた。

その後「心の理論」研究はさまざまなヴァリエーションのもとに展開されているが、基本的には他者理解あるいは自己理解の認知的側面にのみ重点をおいているという点で共通している。しかし、他者の心というのは、単に認知の対象ではなく、相手の感情、情動や身体的な表情などと一体となって共感的に把握されるものであろう。「心の理論」研究が盛んになったことに対して、それまでの言語認知障害説からのアプローチに対して社会的障害に注目するという点をとりあげて「カナーへの回帰」というとらえかたをする向きもあるようだが、その解釈は表面的なものといえよう。「心の理論」の起源を解明しようとする場合に、人と人との交流の場で生じる心身一体となった現象に注目すべきではないだろうか。ホブソン(14)によれば、自閉症はなによりも情緒、共感の障害である。人と人との原初的な交流の場に「心の理論」の起源あるいは他者理解ー自己理解の発端があるものと思われる。

中野(15)は「「心の理論」」でいう「心」と一般に我々が相手の心が分かるという時の「心」にはずれがあるとしている。前者の「心」は mind であり、理知的な心の働きを意味するのに対して、後者の「心」は情緒的意味あいが強くむしろ heart に近いという。そして「心の理論」研究で扱われるのはもっぱら理知的な mind による mind の理知的な理解であり、抽象的で一般的な他者（例えばサリーに代表されるような）の mind を把握することが相手の心を理解することだということになる。しかし、実際に子どもの立場に立って考えれば、相手の心や意図を理解することは、具体的な場で具体的な特定の他者との間で情緒的・身体的な関りを持ちながらなされるものではないかと指摘している。そして「心の理論」の起源を探るにしても、抽象的化された他者の理知的な心の理解の起源ではなく、親しい他者との関りの中で、身体的情緒的共感の場に他者理解の起源を求めるべきだとする。

また浜田(10)も「心の理論」というのは概念的な他者の心の理解だとし、他者の心を概念レベルで捉えるためには、その概念以前のところで他者というものを一人の心をもつ主体として捉えていなければならないとしている。概念以前の他者理解とは身体レベルで他者のパースペクティブを捉えるということである。健常の子どもの場合、概念レベルでは他者を理解できなくても概念以前の身体レベルでの他者の把握はしっかりできており、それが幼児期の自己中心性などの特有の心性を生じさせるとしている。そして自閉症ではその概念以前の身体レベルでの他者理解に問題があるのではないかとしている。

この身体レベルでの他者理解とは何か、それを理解するためにまず身体について考えてみよう。古来、身体は精神と別なものであるという見方が一般的であった。中村(16)によれば、日本語の「からだ」は枯や殻に由来し、魂の抜けた身体を意味した。そして精神や魂がその殻に宿るというのが通念であった。身体はひろがりを持つものとして物の世界に属し、精神は思考するものとしてそれとは違った存在原理によるとしたデカルトはこの通念を徹底させたものであろう。このような心身二元論の考え方によれば、身体は人間の心とは無関係な一種の機械であり、人間理解のための研究対象ではなくなるであろう。しかし、木田(17)によれば、身体は、むしろ世界というものの出現を可能ならしめるような行動の統合化が行われる場面なのであり、これこそが〈世界内存在〉の主体なのである。フッサールやメルロ＝ポンティの身体論によって、人間存在の基盤としての身体という認識が打ち立てられて以来、身体は人間理解の要となったといえよう。

身体は明瞭な物理的境界を持ち、その境界の内と外を分ける。普通、境界の内側に自己は感じられるものであり、外側は自己でないものの領域である。デカルト流に考えれば、自己でないものの領域は未知であり、自己（精神）にとって探求や認識の対象となるものであろう（デカルトの場合には、身体さえも最後には境界の外に追いやられてしまったのだが）。身体はこのように自己と自己でないものを決然と分かち、人と人とを隔てるという面があるのだが、それは身体の働きのう

ちの一面にすぎない。むしろ身体を持つがゆえに人と人との交流が生じるという面を理解すべきであろう。浜田(10)は身体のもつこの両義的な二面を身体の個別性と共同性として区別し、さらに身体の共同性の面には同形性と相補性という2つの契機が認められるという。

同形性とは人どうしが同じ身体を持っていて、お互いの身体が相互の動きに応じて同じ姿勢を取り合うというものである。例えば相手の顔がこわばればこちらの顔もこわばるとか、相手が赤面すればこちらも赤面するということがその例である。これは相手の身体のの動きを表象してそれをまねるといった知的回路を通じてではなく、人どうしの身体を直接結び付ける回路があるかのような現象であり、赤ちゃんの共鳴動作 co-action はそのもっとも初期の現れである。これに対して相補性は身体を通した人と人とのやりとりの側面である。例えば、握手をする場合、自分は能動的な主体として相手の手を握るが、同時に相手によって手を握られてもいる。相手によって受動的に手を握られている時、相手は私の手を握る能動的な主体として感じられる。この能動と受動のやりとりは、直接身体と身体が触れ合う時だけではなく、目と目が合うという場合にもみられる。自閉症においては同形的側面は比較的良好に保たれているが相補性に困難があるのではないかというのが浜田(10)の主張である。自閉症児によくみられるエコラリアやテレビのCMをそっくりそのままねるという特徴は同形性を示すものである。しかしこれらの模倣は普通の子どもにみられる模倣とかなり違ったものであり、模倣のやりとりになっていない。確かに自閉症児に接して最も強く感じる事は、抱こうとしても抱かれる姿勢をとらないとか、目を合わせる事が難しいといったやりとりの面であろう。

自閉症におけ共同主観性

市川(18)は身体レベルでの通じ合いを同調と呼ぶが、浜田と同じように同形的同調と相補的ないし応答的同調に区別している。同形的な同調が内面化されることによって相補的な同調が可能になり、また顕在的な相補的同調は、潜在的なレベルでの同形的同調を前提としており、それと円環をなすことによって、より深いレベルの同調に達するという。そして深いレベルの同調において人と人との対話が可能となるような共同主観的な場が生成するという。自閉症児の場合を考えると、その円環が断ち切られることによって、低いレベルの同調に留まることになり、その結果として人との間に共同主観的な場を持つ事が困難になると考えられるのではないか。また、同調の能力が失われる場合には、「世界は深さをもたない単なる延長、よそよそしく冷たい芝居の書き割りのような単なる表面となり、私はいかなる存在とも共感することができなくなる」として、分裂病の体験する世界をその例としてあげているが、これはかなりの部分が自閉症にもあてはまるものといえるのではないだろうか。

また「相互主観的な世界は、私が他者を意識の対象としてとらえ、かつ自分が他者の意識の対象となっていることを自覚することをとおして把握される。前者は他者の対象身体を介して、後者は私にとっての私の対他身体をとおして了解される」といわれるように、相互主観的な世界は相互の身体を介して自己と他者が通じ合い、またその通じ合いを通して自己と他者が分化することによって生成するものである。このことから自閉症では自己や他者が分化する以前の非人称的で根源的な共生の世界にあり、従ってそこでは相互主観性が失われ、彼らは誰とも共感する事のできない世界にあるということになるのではないか。それでは自己も他者もない世界とはどういう世界であろうか。

中田によれば、私の体験はそれ自体において「われわれ」ということがあらかじめ前提とされている。この意味するところを具体化すれば以下のようになるであろう。例えば私がイスを見る時、そのイスは「座るもの」としての意味を持っている。座るものとしての意味とは

そのイスの座板の部分に尻を乗せ、背もたれには背中を押しつけるという身体感覚を含んでいる。これはギブソン(19)が知覚のアフォーダンス呼んだものと近いであろう。それは表象的なものではなく、見ることと見る者の身体の動きが一体となってもたらされるものである。佐々木(20)が「見るということは対象の見えが導くようにからだが動く事であり、そのようにからだが動いているという事が、すなわち見えているということなのである」と述べているように、我々の知覚体験はすべてこのように身体のアクションを契機として持っていると考えられる。そしてこのような物の意味は自己と他者とその間の物からなる三項関係を通じて他者の身体を通じて敷き写されるものである。その最初の出現は母親と赤ちゃんとその間にあるおもちゃとの間でなりたつ三項関係である。母親がそのおもちゃをどのように扱うかがその物の意味であり、身体の同形性と相補性を通じて赤ちゃんに敷き写されるのである。これは例えばイスは「座るもの」という形で一般化された物の意味の側面である。私や他者が関与する以前の「われわれ」の体験という非人称的な意味の体験である。メルロ＝ポンティ(21)が現勢的身体の層と習慣的身体の層の区別をたてた時に後者に関連する体験だといえよう。

このような物の意味からなる世界は我々に慣れ親しんだものとなり、そのなかでわれわれは自由に行動することができるのである。この一般的意味の上に私や他者の個別的な体験（メルロ＝ポンティの現勢的身体の層）が可能となのであるが、個別的な体験の下層にはこの一般的な意味の層が基盤としてあり個別的な体験を規定しているのである。これが中田の言わんとするところであろう。自閉症においては上述のように、身体の同形性はある程度機能しているが、相補性に困難があるために同形性と相補性の円環が滞ることにより、個別的な意味の形成以前における意味発生の原初ともいうべき物の一般的な意味の形成においてすでに困難があるといえるのではないか。従って、自閉症にあっては我々のように人間的世界のまわりの一般的世界のうちにしっかりと根を下ろすことが難しいのではないだろうか。

この一般的意味の層、あるいは自我喪失的な「われわれ」という体験様式がいわゆる共同主観 anonymes Mitsubjekt を形成しているであろう。この共同主観においてわれわれは同じ一つの世界をとおして共存している。また逆に、この同じ一つの世界という意識が生じるのは、主題的な他者構成に先だって非主題的な他者の存在がすでに私に知られているからである。このように、他者が私にとって匿名的に機能する存在者として非主題的に意識されているからこそ、他者を主題的に措定したり、他者と共通の世界を持ったり、他者の振る舞いを通して感情移入をしたり、他者を了解したりすることができるのである。この共同主観の場から自己と他者が生成してくるのであるが、市川(18)はその過程について次のように述べている。主体としての自己の成立は主体としての他者の把握と相関している。また我々が身体としての自己を明瞭に把握する事ができるのは、我々が自己の身体を内側から主体身体としてとらえると同時に、外側から対象身体としてもとらえているという事実に依存している、と。この外側から対象身体としてとらえたものはいわゆる対他身体であり、他者の主題的把握により可能となるものであろう。

以上のことから、自閉症においては共同主観の成立が不全であり、またそのことにより非主題的な他者の存在が成立しにくい。そして非主題的な他者が成立しにくいことによって主題的な他者が生成しにくい。そして自閉症児の身体は、主題的な他者に相関的である対他身体という契機が不全となる。対他身体は自己を主題的に把握することを可能にするものであり、従って自閉症児においては自己の主体的把握が困難であると考えられる。自閉症児にみられる同形的行動、例えば、他の子どもの泣き声を聞いて怒ったり泣き出すなどは、他者の感受性と自身の感受性とが未分化であり、内受容性によって与えられるもの

と、外的知覚によって与えられるものとを絶対的に区別することができないためと思われる。

おわりに

自閉症の発見者とされるカナーは当初、自閉症児の示す独特の対人行動により、情緒的接触の障害がこの障害の本態であるとした。それは彼らの対人行動が、精神分裂病患者と接触した時に感じられるプレコックスゲフュールと呼ばれるものと似た印象を与えたからであろう。分裂病においては、誰かと対面していても、患者の振る舞いはまるで患者にとってそこに他者がいないかのように感じられる独特の疎隔感があり、心を通じ合わせることが困難だという印象があるとされる(22)。これは自閉症児に接した時に我々が感じるものでもある。そのためにカナーは自閉症を分裂病の早発型と考えたのである。このように自閉症は最初、人との関りの問題として捉えられたのである。しかしその後の自閉症研究においては、自閉性を個人の言語・認知という一般的な能力の障害に還元しようとする傾向の中で、対人間の情緒的接触の側面は忘れられていった。最近の「心の理論」研究は「他者の心」あるいは「自分の心」といったものを問題にするという点では自閉症児の対人的な面に再び照明を当てた観がある。しかし、あくまでも「心の理論」は認知能力の一種であり、その能力を獲得することではじめて他者とのコミュニケーションが可能となるものと考えられていることから、浜田(23)のいう個体能力論の枠にとどまるものといえよう。

むしろ、「心の理論」があるから対人的コミュニケーションが可能となるのではなく、ある種の対人的関りがあってはじめて「心の理論」が可能となると捉えるべきであろう。本稿ではこのような視点から自閉症における初期の対人関係に焦点を当て、主として市川の身体論によりながら身体レベルでの他者理解の様態を分析した。そして自閉症の根本的問題がフッサールのいう共同主観の問題であり、そこから派生する自己と他者の生成の困難であることを明らかにした。

引用文献

(1) 川瀬泰治　一九九五　関係発達論としての自閉症研究　別府大学紀要
(2) 川瀬泰治　一九九七　自閉症児における常同行動の意味について　別府大学紀要
(3) 木村敏　一九八二　時間と自己　中公新書
(4) 中田基昭　一九八四　重症心身障害児の教育方法　東京大学出版会
(5) Baron-Cohen, S., Leslie, A. M. and Frith, U. 1985 Does the autistic child have a "theory of mind"? Cognition,21,37-46.
(6) Frith, U.　一九九一　富田真紀、清水康夫（訳）　自閉症の謎を解き明かす　東京書籍
(7) Peterson, C. C. and Siegal, M. 1995 Deafness, conversation and theory of mind. Journal of Child Psychology and Psychiatry 36,459-474.
(8) Hobson, R. P. 1995 Blindness and psychological development 0-10 years. University of Warwick.
(9) Zelazo, P. D., Burack, J. A., Benedetto, E. and Frye, D. 1996 Theory of mind and rule use in individuals with Down syndrome : a test of the uniqueness and specificity claims. Journal of Child Psychology and Psychiatry.
(10) 浜田寿美男 1992 「私」というもののなりたち ミネルヴァ書房
(11) Ozonoff, S., Pennington, B. F. and Rogers, S. J. 1991 Executive function deficits in high-functioning autistic individuals : relationship to theory of mind. Journal of Child Psychology and Psychiatry 32 1081-105.

(12) Mitchell, P. 1997 Introduction to theory of mind : children, autism and apes Hodder UK.
(13) 熊谷高幸 1993 自閉症からのメッセージ 講談社現代新書
(14) Hobson, R. P. 1993 Understanding persons : the role of affect. in S. Baron-Cohen, H., Tager-Flusberg and Cohen, D. J. (eds) Understanding other minds : Perspectives from autism. Oxford University Press.
(15) 中野茂 一九九七 マインドの理論から心情共感論へ：乳児期に始まる心を分かち合う関係 in 心理学評論40巻1号
(16) 中村雄二郎 一九七七 哲学の現在 岩波新書
(17) 木田元 一九九一 現代の哲学 講談社学術文庫
(18) 市川浩 一九七五 精神としての身体 勁草書房
(19) Gibson. J. J., 古崎敬他（訳） 一九八五 生態学的視覚論 サイエンス社
(20) 佐々木正人 一九八七 からだ：認識の原点 東京大学出版会
(21) Merleau-Ponty, M., 竹内芳郎他（訳） 一九六七 知覚の現象学 みすず書房
(22) Blankenburg, W., 木村敏、岡本進、島弘嗣（訳） 一九七八 自明性の喪失 みすず書房
(23) 浜田寿美男 一九八四 子どもの生活世界のはじまり ミネルヴァ書房